

[論文]

教職科目「総合的な学習の時間の指導法」の 試行による成果と課題

市川 洋子

About the Consequences of the Trial of the Instruction Method of the Period for Integrated Study

Yoko ICHIKAWA

The curriculum of the teacher-training course was revised, and a new curriculum began in 2019. “The instruction method of the Period for Integrated Study” was introduced into the curriculum of the teacher-training course newly. This subject is carried out after 2020, but I tried it this year in this university.

The purpose of this research is to analyze the result and the problem of the class, and to get a suggestion for the next practice of this subject.

1. はじめに

教員養成は、社会の要請に応えるべく行われなければならないのは当然であるが、「大学では学芸的側面が強調される傾向があり、そのことは、課題が複雑・多様化する教育現場から、例えば初任者が実践的指導力や学

校現場が抱える課題への対応力を十分に身に付けていない」⁽¹⁾といった批判を受けてきた。このことから、教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討が行われ、教育職員免許法の改正（2016〔平成28〕年11月）および教育職員免許法施行規則の改正（2017〔平成29〕年7月）が実施された。この教職課程コアカリキュラムとは、「教育職員免許法及び同施行規則に基づき全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示すもの」⁽²⁾である。これにより、教職課程をもつ大学は、教員免許の校種・教科に関係なく共通性の高い科目を作成することとなった。

本学では、教職課程コアカリキュラム「総合的な学習の時間の指導法」を2学年が受講することになっているので、本格実施は2021年度からの予定であるが、それに先立ち、2019年4月から国際学部子ども教育学科の2年生を対象に選択必修科目として試行を行った。

そこで本研究では、新たに教職課程に取り入れられることとなった「総合的な学習の時間の指導法」の目的・目標を確認し、平成29年改訂の学習指導要領の内容を踏まえてシラバスを作成・実施し、成果と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 「総合的な学習の時間の指導法」の内容

（1）「総合的な学習の時間」創設の経緯と趣旨

1998（平成10）年改訂の学習指導要領に対して、多くのメディアが「ゆとり教育は失敗であった」「ゆとり教育が学力低下を招いた」と批判し、学力低下の元凶として「総合的な学習の時間」が槍玉に挙げられた。これまで2度の改訂で授業時数が削減されたにもかかわらず、大学の教科科目に導入されることとなった。なぜこれほどまでに総合的な学習の時間が重視されるのだろうか。

まず、1996（平成8）年7月の中央教育審議会第一次答申⁽³⁾において、「子供たちに『生きる力』をはぐくんでいくためには、言うまでもなく、

各教科、道徳、特別活動などのそれぞれの指導に当たって様々な工夫をこらした活動を展開したり、各教科等との連携を図った指導を行うなど様々な試みを進めることが重要であるが、「生きる力」が全人的な力であるということを踏まえると、横断的・総合的な指導を一層推進し得るような新たな手だてを講じて、豊かに学習活動を展開していくことが極めて有効であると考えられる」として、「一定のまとまった時間（以下、「総合的な学習の時間」と称する）を設けて横断的・総合的な指導を行うこと」を提言した。

つまり、全人的な力である「生きる力」を育成するには、横断的・総合的な指導が極めて有効であるということだ。変化の激しい社会をよりよく生きていくために必要なのは、知識を羅列的に暗記し、それを再生するような学力ではなく、獲得した知識を活用して実社会・実生活の課題を探究することができたり、新たな知を創造したりすることができるような学力である。そのような学力は、各教科の分化主義がもたらした教育の閉鎖性の中では十分に育成することができないということである。

（２） 学習指導要領「総合的な学習の時間」の 改訂の趣旨とポイント

2017（平成29）年に学習指導要領が改訂され、総合的な学習の時間の理念が維持されるとともに、より具体的な実現の姿を示した。例えば、「①課題の設定 → ②情報の収集 → ③整理・分析 → ④まとめ・表現」⁽⁴⁾ という探究のプロセスである。また、総合的な学習の時間に入力してきた学校ほど学力テストの平均点が高いという、文部科学省／国立教育研究所が行った全国学力・学習状況調査の分析などの結果から、総合的な学習の時間の有効性を報告している⁽⁵⁾。そのうえで、以下の課題が示された⁽⁶⁾。

・総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにするということについては学校により差がある。これ

まで以上に総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるようにすることが求められている。

- ・探究のプロセスの中でも「整理・分析」、「まとめ・表現」に対する取組が十分ではないという課題がある。探究のプロセスを通じた一人一人の資質・能力の向上をより一層意識することが求められる。

このような現状を踏まえて、「総合的な学習の時間においては、探究的な学習の過程を一層重視し、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものとするとともに、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成する」ことを基本的な考え方とし、以下のような改訂のポイントが示された⁷⁾。

- ① 総合的な学習の時間の目標は、探究的な見方・考え方を働かせ、総合的・横断的な学習を通して、よりよく課題を解決するための資質・能力を育成することを目指すことを明確に示した。
- ② 各学校が教育目標を踏まえて総合的な学習の時間の目標を設定すること。
- ③ 目標を実現するにふさわしい探究課題を設定すること。
- ④ すべての学習の基盤となる資質・能力を育成するため、協働して課題を解決しようとする学習活動や、言語により分析し、まとめたり表現したりする学習活動（「考えるための技法」を活用する）、コンピュータなどを活用して情報を収集・整理・発信する学習活動（情報手段の基本的な操作を習得し、情報や情報手段を主体的に選択、活用できるようにすることを含む）が行われるようにすること。
- ⑤ 自然体験やボランティア活動などの体験活動、地域の教材や学習環境を積極的に取り入れること。
- ⑥ プログラミングを通して学習活動を行う場合は、探究的な学習の過

程に適切に位置付くようにすること。

(3) 現状(大学生対象の調査)から

筆者は、2009年4月に、国立大学学生354名(教育学部以外の「総合演習」「現代教育論」を受講する1～4年生)を対象に、総合的な学習の時間についての意識調査を行った⁽⁸⁾。その結果、総合的な学習の時間にどのようなことを行ったかを聞いたところ、最も多かったのが「自習」であった。また、以下のような意見もみられた。

嫌な時間だった(中略)小学生の時には、何のために調べたりしているのか正直わからないでいた気がする。たぶんそれは、先生が総合的な学習の時間に慣れていなかったことが理由として挙げられると思う。説明などを聞いている時間などの記憶はほとんどない。ただ、何かについて自分たちで調べて、最後に皆の前で発表します、程度だった気がする。しかも、興味のなかったのか、テーマも覚えていないし、どうやってテーマを決めたのかも覚えていない。さらに、一緒にのグループだった子が、主体性の欠ける子だったので、私がほとんど一人でやったようなもので、嫌な記憶しかないわけである。(法経学部1年、男)

中学生の時、PBLのような経験をした。その時我々は地元の特産について学んだ。我々の班の発表は比較的スムーズだったが、中には、最終的にぐだぐだなものしかできない班もあった。(中略)自由度の高い学習においては、それを指導する教師の柔軟な多様性のある知識や姿勢がないと、いいものができにくいのを感じた。そういう教師によるヒントや軌道修正が、いい学習を生む。(法経学部1年、男)

この調査は、総合的な学習の時間が創設されて10年しか経っておらず、教育現場での理解が十分とは言えなかったのも、このような結果となってしまった。しかしながら、今回の改訂においても「総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習

表1 総合的な学習の時間についての学生の意見

-
- ・なぜ、教科の授業を減らしてまで行われるのか？
 - ・「総合的な学習の時間」の目的は何か？
 - ・「生きる力」を育むために何をしたらよいのか？
 - ・理想の総合的な学習の時間の使い方は？
 - ・総合的な学習の時間の理想的な内容とは？
 - ・「総合的」とは、何の総合か？
 - ・県や国で内容等を統一しないのはなぜか？
 - ・小学校・中学校における活動の違いは？
 - ・生活科、道徳、学活との違いは何か？
 - ・評価の基準はどう決めるのか？
 - ・評価基準とは？
 - ・評価規準とは？
 - ・どのように評価をつけているのか？
 - ・テスト前の総合的な学習の時間が自習になるのはなぜか？
-

の時間と各教科等との関連を明らかにするということについては学校により差がある」ことが課題として挙げられていることから、総合的な学習の時間の実施状況はそれほど大きく変わっていないと言える。

本学の学生に聞き取りを行った（2019年9月）範囲でも、その状況はあまり変わっていないことが示された。「総合的な学習の時間の指導法」の1時間目に、これまで総合的な学習でどのようなことを学んできたか、どんなことに疑問点をもっていたかを挙げさせたところ、学生から表1のような疑問が出された。これらの疑問は、学生が総合的な学習の時間についてできるだけ疑問を出し、その中から優先順位をつけ、上位3つを選んだものである。これを見ると、教師から提示された課題をグループで取り組むこともあれば、行事の準備をしたり、教科の補習になったりと場当たりので、総合的な学習の時間が何の時間だったのかよくわからずにやらされていたということが推測される。

（４）「総合的な学習の時間の指導法」の目標

総合的な学習の時間の指導法の全体目標は以下のとおりである^⑨。

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、

自己の生き方を考えさせていくための資質・能力の育成を目指す。

各教科等で育まれる見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画の作成および具体的な指導の仕方、並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける。

総合的な学習の時間の指導法は、①総合的な学習の時間は、横断的・総合的な学習を通して課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する時間であることを理解する、②教科等での学びを活用して実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画や具体的な指導法、評価に関する知識・技能を身に付ける、の2つの目的にまとめることができる。

内容的に、3つの一般目標に分けられ、それぞれに2つずつの到達目標が設定されている。一般目標は以下の3つである⁽¹⁰⁾。

- (1) 総合的な学習の時間の意義や、各学校において目標および内容を定める際の考え方を理解する。
- (2) 総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身に付ける。
- (3) 総合的な学習の時間の指導と評価の考え方および実践上の留意点を理解する。

(5) シラバス作成

① 到達目標

本授業では、総合的な学習の時間の意義、探究的な課題解決活動を通して育むことができる資質・能力、各学校において目標・内容を定めることの意味などの基本的な知識の獲得を目指す。また、総合的な学習の時間の

指導計画作成を通して、各教科との関連性や、主体的で対話的な学びを引き出すにはどうしたらよいか、評価の在り方（evaluationとassessment）について、実践的に学んでいく。そのために、以下の到達目標を設定した。

- ・総合的な学習の時間の意義や各学校において目標や内容を定める際の考え方など、総合的な学習の時間に関する基本的事項について説明することができる。
- ・総合的な学習の時間の指導計画作成を通して、カリキュラム・マネジメントの基礎的な能力を身に付ける。
- ・総合的な学習の時間において児童が深く学ぶためには、評価に対する教師の考え方が重要であるということを理解し、具体的な方法について知ることができる。

② 授業デザインの基本的な考え方と概要

授業をデザインするうえで、総合的な学習の時間の基本的事項の理解や指導計画作成のスキルを身に付けることは大切であるが、それ以上に重視したのは経験主義的なカリキュラムの考え方や意義を理解したうえで、総合的な学習のカリキュラムをデザインするのは教師自身であることを認識させることである。

今回の学習指導要領改訂において、「(教師が) いかに関わるか」から「(子どもが) いかに関わるか」にシフトし、子ども中心の考え方に変わったことは明白である。しかしながら、これまで教師主導の授業で育ってきた学生にとって、授業は教師が決められた順序通りに教え導くものであるという考え方が根深い。総合的な学習は、子どもたちが学ぶ時間であり、教師と子どもが協同でカリキュラムをつくりあげていくものであると言ってもよい。そして、子どもたちがより主体的、意欲的に学べるような環境を整備することが教師の支援である。そのことについて授業を通して気付いてもらいたいと考えている。

そこで、授業を計画する際に以下のことに配慮した。

1点目は、本授業を「体験」「基本的事項」「カリキュラム作成」の三部構成とした。「体験」では、実際に探究活動や発表を行って、探究的な学

習活動のよさや教師の支援の在り方について体験を通して考える。「基本的事項」では、これまでの総合的な学習経験を振り返って疑問点や課題を洗い出したうえで、総合的な学習の時間の意義や原理等の基本的事項についての講義を聴き、その答えを明らかにする。そうすることにより、ただ漫然と説明を聞くのではなく、能動的に聞くことができるようになると考えたからである。また、総合的な学習の時間の意義については、学習指導要領の読解だけでなく、グループディスカッションを通して理解し、経験主義的な視点から考えを深める。「カリキュラム作成」では、総合的な学習の時間で身に付けたい資質・能力（評価規準）の作成、および全体計画・年間指導計画作成を通して、総合的な学習の時間の基本的な考え方やカリキュラム・マネジメントの基礎的な能力を身に付ける。

2点目は、「体験」では、Project Based Learning（PBL）の手法を援用したプロジェクト型の総合的な学習を行う。テーマ、ゴール、調べる必要のあること、活動計画をグループで企画し、実行する。また、このプロジェクトで身に付けたい資質・能力（評価規準）を選択させ、それを基にして学習履歴図を使って毎時間振り返り、自分たちのプロジェクトをコントロールしていく。

3点目は、偶然にも「東南アジア青年の船」の若者たちを本学で受け入れて交流する⁽¹⁾という機会を得ることができたので、学生たちが小学生になったつもりでどのような交流会にしたいか、どのようなことで交流するか企画し、交流プロジェクトとして取り組ませることとした。

4点目は、授業で配る資料にすべて通しでページ数を入れ、授業がすべて終了した時点で冊子となるようにした。

5点目は、本学の学生は主に県内出身者が多いので、地域別にグルーピングすることとした。指導計画を考える際は、地元の仮想の小学校教師という立場で、指導計画や地域にどのような学習素材があるかを考えさせた。地域がそろわないグループは、仮想の地域とした。

表1は、実施した授業の内容である。太字枠が三部構成の部分である。

表 2 授業の実施内容

時間	主な内容	学習内容
1	総合的な学習経験の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・ガイダンスとグルーピング(出身地別) ・総合的な学習経験の振り返りと総合的な学習の時間に関する疑問や課題の抽出
2	探究的な学習活動①	<ul style="list-style-type: none"> ・企画書の書き方、学習履歴図の書き方 ・作成した学習指導案に基づいて、課題を設定し、企画書を作成する。
3	探究的な学習活動②	<ul style="list-style-type: none"> ・企画書に沿って探究活動(評価活動を含む)を進める。
4	探究的な学習活動③	<ul style="list-style-type: none"> ・企画書に沿って探究活動を深める。
5	探究的な学習活動④	<ul style="list-style-type: none"> ・探究活動のチェックと見直し
6	探究的な学習活動⑤	<ul style="list-style-type: none"> ・交流活動に向けて最終確認
7	探究的な学習活動⑥	<ul style="list-style-type: none"> ・交流活動
8	総合的な学習の時間の意義	<ul style="list-style-type: none"> ・交流活動の振り返り ・総合的な学習の時間が創設された経緯および趣旨、総合的な学習の時間に育成する資質・能力、各学校において目標および内容を定める際の考え方などの基本的事項について ・グループディスカッションを通して、経験主義的なカリキュラムに関する考えを深める。
9	指導計画の作成と内容の取り扱い	<ul style="list-style-type: none"> ・指導計画作成や内容の取り扱いにおいて配慮すべき項目 <ul style="list-style-type: none"> －主体的・対話的で深い学び －他教科とのつながり －探究的な学習で扱う内容について
10	総合的な学習の時間における評価の考え方	<ul style="list-style-type: none"> ・学習活動に埋め込まれたアセスメントという考え方 ・逆算のアプローチによるカリキュラム・デザインについて ・具体的な評価方法(ポートフォリオ評価、パフォーマンス評価、学習履歴図)
11	事例に学ぶ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもを学びに向かわせる教師の支援の在り方について事例を通して考える。
12	〇〇小学校の全体計画を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇小学校の目標設定 ・総合的な学習の時間で育てたい資質・能力の評価規準表作成 ・地域素材と学習活動
13	〇〇小学校〇学年の年間指導計画を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇小学校の年間指導計画作成 ・単元配列表から各教科等の関連を考え、年間指導計画に反映させる(カリキュラム・マネジメント)。
14	〇〇小学校〇学年の単元指導計画を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の時間の1単元分の指導計画を考える。

15	授業の振り返り	①1時間目に抽出した疑問の答えを考察する。 ②探究活動における取り組み、グループへの貢献度、自身が付けたい力について、評価規準をもとに振り返る。 ③授業全体を通して、この授業の目標を達成できたか振り返る。 ④学習履歴図の効果、教師がどこでどのような支援を行ったらいいかについて考察する。
----	---------	--

3. 成果と課題

(1) 成果

当初は、実際の活動を第3部に計画していたが、大学のイベント日程の関係で第1部に移動することとなった。しかしながら、そのことが意外な成果をもたらした。表2は、交流活動後の学生の振り返りシート「この活動で学んだこと」である。27名から回答を得、学んだことを内容ごとにまとめた。

異文化交流活動なので、「非言語でもコミュニケーションがとれる」「英語をもっと勉強したい」といった感想が多くなることは当然予想された。注目したいのは、「このようなことが、総合的な学習の時間が目指している生きる力だと、体験し、学ぶことができた」「目標を達成するために解決方法を探すという経験が、この活動のポイントだと感じた」「ただ調べる、ただ勉強するのではなく、目的やゴールを作り、それに向けて活動していくことで、モチベーションの維持・向上ができ、質の高い学びができるようになるのではないか」などの総合的な学習に関する気付きをもてたことだ。教員を目指す学生という立場で総合的な学習の時間を体験することによって、全員ではないが、この時間の意義や目的を指導者の立場に立って実感的に理解することができた。

また、第2部の基本的な事項についての聴講や、第3部の指導計画作成において、自分たちが体験した活動を想起しながら聞いたり、活動したりしたので、より具体的に考えることができた。特に、評価の部分は、

表3 この活動で学んだこと

交流活動に関する 気付き	英会話力の足りなさ。英語をもっと勉強しよう。(10名)
	非言語でコミュニケーションがとれること、コミュニケーションの重要性 (9名)
	協力することの大切さ、伝えることの難しさを学んだ。(3名)
	音楽があればみんな楽しめる。
	自ら挑戦し、進んで取り組む力が大切であることを学んだ。
	狭い視野にとらわれることなく、広い視野で物事を考えたい。
総合的な学習に 関する気付き	また今度このような交流の機会があったら、今回見つけた課題を見直し、発信してい きたい。
	新たに発生することへの対処が必要だった。このようなことが、総合的な学習の時間 が目指している生きる力だと、体験し、学ぶことができた。(2名)
	プロジェクト自体が不安でいっぱいだったが、自分が思い描いていた以上のことがで きた。
	目標を達成するために解決方法を探すという経験が、この活動のポイントだと感じた。
	ただ調べる、ただ勉強するのではなく、目的やゴールを作り、それに向けて活動して いくことで、モチベーションの維持・向上ができ、質の高い学びができるようになる のではないか。
	他国について調べるだけでなく、自国について詳しく調べ、豊富な知識を得ることで 異文化交流の楽しみ方の選択肢が増えると思った。
	言葉や国を超えたコミュニケーションを子どもたちにもぜひ経験してもらいたい。
	自ら主体的に働きかけることで、自分だけでなく周りの人も同じように働きかけ、相 互に思いをもって行動できることがある。

総合的な学習の時間を進めていくうえで難しい部分である。今回は、学習履歴図という自己評価ツールを使用し、毎時間の学生の自己評価と教師による見取りとフィードバックを実施した。この経験が、評価の難しさを緩和させたのではないだろうか。この経験がなければ、evaluationとassessmentの違いや自己評価がなぜ重要かといった内容を聞いても、具体的なイメージをもてなかったであろう。

本学の学生は主に県内出身者が多いので、地域別にグルーピングした。指導計画を考える際は、小学校教師という立場で、指導計画や地域にどのような学習素材があるかを考えさせた。そのことにより、教育を受ける立場と教育を行う立場を往還しながら授業を受けることができたのではないだろうか。

(2) 課題

今回、授業を通して最も重視したのは、教師自身が「授業をデザインする」ということを意識するということであった。そのうえで、経験主義的なカリキュラムの考え方や意義といった本質の部分を理解してほしいと考えていた。

【授業後の振り返りシートから】(25名から一部抜粋。下線は筆者による。)

- (ア) ありふれた単元計画に縛られず、地域の特色、児童の興味・関心を組織した計画案を作成したい。
- (イ) 総合的な学習の時間は、おまけの授業のように考えられているが、社会と関わる上で必要であり、(略) この授業でしかできないことや伝えられないことを子どもたちに学ばせたい。
- (ウ) あいまいだった総合の時間の意義について理解することができた。
- (エ) 総合とは難しいものだと思っていたが、全教科とつながりがあったり、教科書がないからこそ難しい。
- (オ) 教科とものつながりや身に付けさせたい力がわからなくなってしまい、単元計画や指導計画を作成していて難しかった。
- (カ) 最初の方で、東南アジアの方々と交流する活動をして意味のあるものなのかな?と
思っていたけど、15回の授業が終わると、意味を実感した。グループで目標を作り、
それに向かってみんなで取り組む活動の楽しさを味わうことができた。
- (キ) 授業を考えるのは大変だと指導案を作っていて感じた。
- (ク) 総合に関して、アバウトな考えしかもっていなかったが、(略) カリキュラム・メーカーになることや環境設定の大切さ、児童の興味・関心を大切にすることなど、他教科にない難しさ、重要性を学べた。このような考えはどの教科にも使える。
- (ケ) 総合の時間に何をやらせようのかかわからなかったので、この授業を受けて、これほど児童が自主的に自分の持っている力を生かし高めながら行うものだという授業であったことに驚いた。

(ア)(エ)(オ)(キ)(ク)の下直線部分は、カリキュラムをつくることを意識した記述となっている。教科書がない、教科とものつながりを考えるといった他教科にはない難しさを、指導計画作成を通して実感している。だからこそ、他教科のカリキュラムをつくる时候にも、総合的な学習の時間のカリキュラムをデザインする考え方が使えるという気付きにつながっているのである。しかしながら、単に教科書や指導書に書かれている通りに授業を行っていくのではなく、カリキュラム・メーカー(デザイナー)としての教師の在り方に気付いた学生は、25名中5名しかいなかった。また、

(イ)(ウ)(カ)(ケ)の下破線部分は、総合的な学習の本質に迫ることができた記述であるが、これも25名中4名であった。

このことから、本授業の目的達成には程遠い。この科目のカリキュラム全体を見直し、受講者が指導者の立場から考える場をもっと設定していく必要があるだろう。例えば、第1部の体験直後に、「教師がどこでどのような支援を行ったらよいか」について考えさせるとよかっただろう。全体計画や年間指導計画を作成するワークは、時間が十分ではなかったので、学生に取り組ませる項目をもっと精選してじっくりと取り組ませるべきだった。今回は、たまたま異文化交流という機会を得ることができ、学生に真正な課題 (authentic task) を提供することができた。今後、真正課題で、短時間 (6コマ) で発表まで行えるような課題 (テーマ) も考えていかなければならない。

5. 終わりに

2019年11月に、Galileo Educational Network⁽¹²⁾を訪問し、この組織の創始者であり、現在も教育委員会と協力しながら教師教育に携わっているカルガリー大学のDr. Sharon Friesenに話を伺う機会を得た。アルバータ州は探究学習を推進しており、訪問した学校のいずれも教師のカリキュラム・デザイン力 (カリキュラム・マネジメント力) が高く、このことにGalileo Educational Networkが寄与していることがわかった。「日本の大学においても、現職教員教育を行っているが、受講する教員のほとんどが伝統的な教育のみを受けてきたので、子ども中心の教育やアセスメントの考え方を頭では理解できても、実践につなげることが難しい状況である」との我々の意見に対して、彼女はこう語った。

Learning Leader Programを受けに来る人は、様々な背景をもち、もちろん伝統的な教育観をもつ人も多い。しかしながら、アルバータ州にはTeaching Quality Standard (1995-) が明確に示され、この存在

が大きい。Teaching Quality Standardの管理職教員用もあり、適し
なければ管理職になれない。新卒教員についても、大学はこのスタン
ダードに合った卒業生であると署名して送り出す。徐々に定着してき
ているが、それでも伝統的教育観から抜け出せない人はいる。

しかしながら、ここの2年間のプログラムで多くの人は変わる。正
しい経験、正しいlearningが重要である。コミュニティも大事なので、
チームアプローチを取り入れている。変わることへの恐怖心がなくな
れば変わる。期待とサポートとコミュニティがあれば、先生は変わ
れると確信している。

入学してきた学生が書くレポートなどを読むと、これまで受けてきた教
育が唯一無二であり、そうであらねばならないとの思い込みが強いことを
思い知らされる。この固い殻を破ることは並大抵ではないが、「総合的な
学習の時間の指導法」を通して、一人でも多くの学生が「子どもが学ぶ」
授業の本質を理解し、実践できるような資質・能力を獲得できるように、
今回の授業での気づきを生かしてよりよい授業に改善していく所存であ
る。

(註・引用文献)

- (1) 文部科学省（平成29年11月17日）「教職課程コアカリキュラム」教職課程コ
アカリキュラムの在り方に関する検討会、p.1
- (2) 文部科学省（平成29年11月17日）同上誌、p.2
- (3) 文部科学省（平成8年7月19日）中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望
した我が国の教育の在り方について」（抄）第2部第1章(1)―[5]
- (4) 文部科学省（平成29年告示）「小学校学習指導要領解説、総合的な学習の時間
編」p.5
- (5) 文部科学省／国立教育政策研究所「平成25年全国学力・学習状況調査報告書
クロス集計」p.15。「総合的な学習の時間」で、自分で課題を立てて情報を集め
整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる学校ほど、
教科の平均正答率が高い傾向がみられたと報告されている。
- (6) 文部科学省（平成29年告示）前掲、p.6
- (7) 文部科学省（平成29年告示）前掲、pp.6-7
- (8) 日本生活科・総合的学習教育学会第18回全国大会「発表要旨集・指導案要項」

p. 212

- (9) 文部科学省（平成 29 年 11 月 17 日）前掲誌、p. 20
- (10) 文部科学省（平成 29 年 11 月 17 日）同上誌、p. 20
- (11) 2019 年度「東南アジア青年の船」事業で、日本と東南アジア各国の青年が、「東南アジア青年の船」に乗船し、船内および訪問国において各種交流活動を行うことにより、相互の友好と理解を促進し、青年の国際的視野を広げ、国際協調の精神の涵養と国際協力の実践力を向上させることにより、国際社会でリーダーシップを発揮できる青年を育成するとともに、青年による事業終了後の青少年健全育成活動などへの寄与を目的として、日本と ASEAN 加盟 10 カ国の政府が共同で実施する。（2019 年度「東南アジア青年の船」事業〔第 46 回〕概要資料より http://www8.cao.go.jp/youth/kouryu/boshu/h31/pdf/asia_gaiyo.pdf）
- (12) Galileo Educational Network は、教員が探究学習や PBL を実施していくには、サポートが必要だろうということで、Dr. Friesen と彼女の大学の教員仲間 3 人で、民間からの寄付で始めた。当初、教育委員会とは関係なく、カルガリーの郊外で、試験的に NPO として始めた。現在は、オフィスをカルガリー大学内に置き、教育委員会と協力関係にある。探究学習や learning leader などの様々なプログラムを提供している。